

第二十三課

求めるものを御父が与えてくださるために、実を結びなさい

力ある祈りへの道である従順

「あなたがたがわたしを選んだではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」

(ヨハネ一五・一六)

「義人の祈りは働くと、大きな力があります。」

(ヤコブ五・一六)

私たちが求めるものは何でも御父がかなえてくださるという約束は、ここでも再確認されています。ここでは、いと高き方の会議室におけるすばらしい影響力が、私たちにまで及ぶということが示されています。主は、「わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためです」と言われます。主は、その目的としてこう付け加えられます。「(実を結ぶ) あなたがたがわたしの名によって父に求め

るものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです」と。これは、「あなたがたがわたしにとどまるなら」と言われたことの、より完全な表現です。主は、このとどまることの目的を、実を結ぶこと、多くの実を結ぶこととしてお語りになりました。これによって御父は栄光をお受けになり、私たちの弟子としてのしるしも明らかにあります。実が結ばれ、実が残ることによって、実際にとどまっていることが明らかになれば、それが、求めるものを獲得する祈りの資格となるとおっしゃったことに不思議はありません。自分たちの召命を全うするために完全に献身することは、効果ある祈りの条件であり、キリストのすばらしい祈りの約束の無限の祝福を得るかぎです。

このような言い方は、自由な恵みの教理に反するのではないかと心配する者がいます。しかし、それは、自由な恵みの教理や、神の他の祝福のみことばについての説明を正しく理解していないからです。ヨハネのことばを例にとってみましょう。「私たちは、ことばや口先だけで愛することせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。それによって……神の御前に心を安らかにされるのです。……また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです」(Ⅰヨハネ三・一八、一九、二二)。また、よく引用されるヤコブのことばがあります。「義人の祈りは働くと、大きな力があります。」これは、聖霊の定義に従えば、「義を行なう者は、キリストが正しくあられるの

と同じように正しい」ということになります。また、ここで、求める者の誠実さや義に訴えている詩篇の記者たちの精神に注目してみましょう。ダビデはこう言っています。「主は私の義にしたがって私に報い、私の手のきよさにしたがって私に償いをされた。……私は主の前に全く、私の罪から身を守る。主は、私の義にしたがって……私に償いをされた」(詩篇一八・二〇―二四。七・三一五、一五・一、二、一七・三、六、二六・一―六、一一九・二二、一五三等参照)。これらのみことばを新約聖書の光の中で注意深く考察してみると、救い主の告別のことばの明確な教えと完全に調和していることが分ります。「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。」「わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。」みことばは、このように文字通り真実です。「わたしが……あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、……また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」

救い主がここで教えておられる精神に立ち入ってみましょう。私たちの信する福音的な教えには、祈りと信仰の中で得られるある種の経験の面のみを重視する危険があります。しかし、神のみことばによって強調されているもう一つの面があります。それは、服従が祝福に通じる唯一の道であるということです。私たちに必要なのは、次のことを自覚することです。すなわち、私たちを造り、贖ってくださった、私たちが神と呼んでいる無限の存在者に対する時に、私たちを動

かす第一の感情は、服従の感情だということです。神の主権と栄光とみこころと御計画に従うことは、私たちの生活の中の、第一の、最高の考え方でなければなりません。神の恵みを得てそれを喜ぶということが問題なのではありません。それでは、その時の主要な関心が依然として自己にあるからです。しかし、この存在者が、その性質上当然要求していること、そしてそれに全くふさわしいことは、神の栄光とみこころを私の唯一の目的とすることです。神の完全な、そして幸いなみこころに従って送る奉仕と服従の生活は、天的な美で、私たちを引きつけるものです。奉仕と服従は、御子がこの地におられた時に、御子の思いを支配していたものです。奉仕と服従は、安息や光、喜びや力以上に、私たちの願いや目標のおもな目的となるべきものです。この奉仕と服従の中にこそ、私たちを待つ最高の祝福への道があります。

主は、とどまることに関するヨハネの福音書一五章のこの個所だけでなく、三位一体を語る一四章においても、このことをいかに重要視しておられることでしょう。一五、一六節にはこうあります。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。」更に、二二節にはこうあります。「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。」更に、この貴重な約束の中でも最高の約束である二三節にはこうあります。

「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」服従こそ、御霊の内住と御子による御父の啓示と、私たちが御父の住いとして整えられる道であることを、これ以上明確に語ることができでしょうか。三位一体の神の内住は、従う者に与えられる財産です。服従と信仰とは、神とそのみこころに従うという、一つの行為の二つの面なのです。信仰が強められて服従となり、服従によって信仰は強められるのです。すなわち、信仰は行いによって完全になります。信じようとする努力がむなしくなることがあります。それは、大きな信仰にふさわしい、それが可能とされる唯一の立場、すなわち、神の名誉と栄光に完全に服従する立場を取ろうとしないからです。神とそのみこころに全くさきげ切った者のみが、神が約束してくださったものがすべて自分のものになるといふ力を得ることができるのです。

折りの学校にこれを適用することは非常に簡単ですが、しかし極めて厳肅なものでもあります。主は言われます。「わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結ぶためです。」多くの実です（二五・五、八）。「そのあなたがたの実が残るためであり……。」それは、あなたがたのいのちが実をとどめ、実を豊かにとどめて、実をとどめた枝が主にとどまることによって、「あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです」。私たちは、なんとしばしば、実を結ぶため多くの恵

みを得ようとして、効果ある祈りをしようと努めたことでしょう。しかし、祈りは答えられませんでした。主の順序を逆に行っているからです。私たちは、困難や自己犠牲なしで、しかも気楽に慰めや喜びや力を求めようとしています。主は、私たちが強いか弱いかを聞こうとされません。仕事にむずかしいかやさしいかを聞こうともされません。信仰の従順によって、言われた通りを実行することを要求されます。実を結ぶ道は、力ある祈りの場所へ導くものです。服従こそ、私たちが神の栄光へ導く唯一の道です。信仰に代る服従や、信仰の欠けを補う服従ではありません。信仰の服従が、神が私たちに用意をされたあらゆる祝福に至る道です。御霊のパプテスマ(二四・一六)、御子の自己啓示(二四・二二)、御父の内住(一四・二三)、キリストの愛にとどまること(一五・一〇)、聖なる友情の特権(二五・一四)、勝利ある祈りの力(二五・一六)、これらはすべて服従を求めるものです。

この学課をもっと深く学んでみましょう。今私たちは、効果ある祈りをする信仰の力が自分ない理由を知っています。自分の生活があるべき姿までいっていないからです。単純率直な服従と、実が残ることが、私たちの生活のしるしとなっていないのです。そして私たちは、神の次のような選定が正しいことがよく分っています。すなわち、神が世界支配にあたって影響力を与え得るような人、その求めに応じてみわざをなしてくださるような人、その意志によって神のみこころが働くような人は、服従を学び、神の権威に対して忠誠を尽し、服従することに疑いを抱

かない人でなければなりません。私たちは、全霊をもって服従と実を残すことが、効果的な祈りの道であるという法則を認めました。そして、私たちがいかにこの歩みをしていないかを知らされて恥しく思いました。

救い主が定めてくださった道に進みましょう。救い主の私たちに對する主としての關係を学びましょう。一日の初めに、慰めや喜びや祝福を求めることをやめましょう。まず、こう考えることにしましょう。私は主のものです。一瞬一瞬、一挙一動、私は主のもの、主御自身の一部、主のみことろのみを知り、それに従う者として行動しなければなりません。主イエス・キリストのしもべ、また奴隸として、この精神が私を支配しますように。「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。わたしはあなたがたを友と呼びました」と主が言われるなら、「わたしはあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です」という友としての立場を受け入れましょう。

主の枝としての私たちに主がお命じになることは実を結ぶことです。他の人の祝福となるように生きましょう。イエスにあるいのちと愛をあかししましょう。また、信仰と服従によって、イエスが私たちを選び、任命された目的、すなわち実を結ぶために全生涯をささげましょう。主が私たちをこの目的に従ってお選びになったことを考え、必要なものをすべてお与えになるお方からこの任命を受けていることを思う時、実を豊かに結び、それが残る生活が、私たちの手の届く

所にあるという確信が強く生れてきます。そして、実を結ぶ生活が、なぜ力ある祈りの唯一の道なのかを理解するようになります。キリストに服従し、主のみに従っていることを示す者に、御父は、その求めるものをかなえてくださるのです。「求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。」

恵み深い主よ。私たちが神の約束によって、神のみこころを把握する力を与えられ、祈りによってそれを完全に生かすには、みこころを受け入れ、命令に従って行動するほかはないことを十分に理解させてください。私には、ほんの少ししか理解できていないからです。枝が木につながって大きく成長し、完成されたものとなり、自分の望むものを何でも求めることができるまであなたと一体になるには、実を結ぶ道しかないことを教えてください。主よ。天の万軍のあかしと地上におられた御子のあかしと、地上であなたの栄光を現した信仰の人々のあかしとによって、神への服従こそ神と一体となる道であり、神の最高の栄光、完全なみこころであり、それゆえに、私たちの最高の特権であることを、どうか私たちにお示してください。あなたの戒めを守り、みこころに従って実を結ぶことによって、私たちの霊性が完全な人間の像にまで成長し、望むも

のを求め、また得ることのできる力が与えられることをお示しく下さい。

主イエスよ。あなた御自身を私たちに示し、あなたとあなたのみことばに全く自分をささげる者たちに、あなたのすばらしい約束を日々体験させてくださるあなたの御計画と御力の真実であることを示してください。アーメン。